

平成 30 年度第 3 回南区まちづくり懇話会 会議録

1 日時 平成 30 年 10 月 11 日（木） 午後 3 時から 5 時まで

2 場所 熊本市南区役所 3 階会議室

3 (1) 出席委員

前出委員、野口委員、小山委員、平井委員、松浦委員、正木委員、吉村委員、岡委員（副会長）、芥川委員、大澤委員、柴田委員（会長）、大村委員、藤本委員

(2) 出席職員

総務企画課職員、区民課職員、飽田まちづくりセンター地域担当職員、天明まちづくりセンター地域担当職員、幸田まちづくりセンター地域担当職員、南部まちづくりセンター地域担当職員、富合まちづくりセンター地域担当職員、城南まちづくりセンター地域担当職員、福祉課職員、保健子ども課職員、保護課職員、南農業振興課職員、

4 配布資料

資料「第 2 回南区まちづくり懇話会ワークショップの意見」

5 次 第

(1) 開会

(2) ワークショップ

「いろんな取り組みを連携させよう」

① イチオシの取り組み

② 意見交換

6 ワークショップの結果

取 組 み	テーマ	農・漁業	連携	自然、子ども
	地産地消(南区の四季を感じる)			
主 体 (だ れ が)	・地域(地域の元気な高齢者) ・一芸のある人 ・農・漁業の関係者 ・行政			
方 法 (ど う や っ て)	南区の四季を感じられるイベントを企画する。 ・4月だけのご掘り ・地域食材を使ったクッキング大会 ・夏からしレンコンを作る ・竹ごはん(秋)+栗ひろい ・新ノリ ・農漁業産物マルシェ開催			

取 組 み	テーマ	歴史・文化	連携	健康、自然
	文化財・寺社等をめぐるウォークラリー			
主 体 （ だ れ が ）	・地域のボランティア見守り隊 ・行政は側面支援			
方 法 （ ど う や っ て ）	・地元の人が勉強して案内人になる ・寺社の法話体験・精進料理・座禅 ・桜や菜の花など四季の樹木・花（桜・菜の花） ・文化財の清掃・草とり ・地元の川に沿ったウォーキング ・人を集めるための工夫（イベント・四季の花・樹木） 《課題》 ・費用は？→参加費 ・高級ウォークラリー 参加費3,000円 ・樹木・花を植える広さが必要→広い方がインパクト 10km			

取 組 み	テーマ	自然	連携	農・漁業、歴史・文化、 健康、安全・安心
	中無田閘門の活用 (天明ミニパナマ運河)			
主 体 (だ れ が)	・地域 ・行政(市・国など)			
方 法 (ど う や っ て)	●プレイパーク(現在は年に2回程度)の充実 ・開催期間の拡充 ・自然遊び(遊泳, カヌー, 釣り, 草スキーなど) ・環境学習 ・サイクリングやジョギングコースを整備 →大人の健康づくりの場に ・季節のイベントの企画 (ジョギング大会, スケッチ大会, ウォークラリー, キャンプ, 屋形船, マルシェ) ※マルシェ: 近くの農園でとれた野菜や果物などの販売・農家レストランなど →大人から子どもまで自然を楽しめる場に ・場所がわかりづらい…… →看板やチラシ, SNSなどでの案内を充実させる ・船での歴史巡り(川尻～)			

取 組 み	テーマ	健康	連携	子ども
	高齢者と子どもの交流の場を作る			
主 体 （ だ れ が ）	・食生活改善推進員 ・8020運動推進員 ・自治会 ・子ども会 ・行政			
方 法 （ ど う や っ て ）	・校区で健康づくり宣言をし、健康への意識付けをする（1日ひと汗を習慣化） ・宣言大会を式典として行う 行政も費用面のサポート ・子どもたちに食の大切さを学んでもらう、食と健康は深くつながっている ・5月 らっきょう漬け／6月 梅干し 7月 カレー／10月 みそ／1月 豚汁 ・高齢者と子どもが一緒にできるスポーツ - グラウンドゴルフ大会			

取 組 み	テーマ	子ども	連携	歴史・文化、健康、安全・安心
	世代間交流			
主 体 （ だ れ が ）	・地域の小中学生 ・地域の高齢者 ・区役所は協力 ・地域包括支援センターささえりあ			
方 法 （ ど う や っ て ）	・高齢者は自宅前でひなたぼっこ（子どもの見守り） ・地域の歴史を文書化（小中学生が調べる） （まちだよりに掲載するなど） ・高齢者のサロンで子どもたちと防災グッズづくり体験 ・高齢の徘徊者への声かけ訓練 ・地域の人がどんどやの成り立ちを子どもたちに教える			

取 組 み	テーマ	安心・安全	連携	歴史・文化、自然、健康、子ども
	ハザードマップの検証・見直しとそれを活用したイベント事業の企画			
主 体 （ だ れ が ）	・地域（住民，自治会，校区防災連絡会） ・行政 ・学識経験者			
方 法 （ ど う や っ て ）	・現在，南区でのハザードマップ作成率は約6割（作成単位は町内自治会） ・震災以前に作成されたハザードマップは，現状が大きく異なっている可能性が大きいため，全面的な見直しが必要 ・災害弱者（子ども，妊婦，高齢者）の立場に立って考え，役に立ちそうな場所や危険な箇所の確認をする（避難にかかる時間なども把握できる） ・歩きながら再発見したことを地図に書き込んだり，高齢者の方に協力してもらい，水害などの災害の歴史を学ぶ ・校区ごとにハザードマップを活用した「ウォーキングイベント」を開催する ・防災フォトロゲイニングなどの<u>ゲーム性の高いイベント</u>を行うことで，子どもたちにも防災意識を芽生えさせることができる ※ゲーム性の高いイベント：参加へのハードルが低い			